

2005年10月5日 ETIC. mailmagazine ~プロを目指す学生たち~

ETIC.mailmagazine ~プロを目指す学生たち~

2005.10.5 Vol.121-1 (全3話)

~後悔はしたくない~

秋沢 崇夫 (あきざわ たかお)さん

所属  
株式会社 ガイアックス  
(<http://www.gaiax.co.jp/>)

プロフィール  
高知県出身。  
青山学院大学経済学部卒。  
大学一年次株式会社ガイアックスにてインターン  
大学二年次株式会社ガイアックスにて二度目のインターン  
卒業後株式会社ガイアックスに就職。現在に至る

第1話: はじめの一步

第2話: 環境と成長と

第3話: 挑戦し続ける理由

-----  
~ 第1話 ~ はじめの一步  
-----

自己発見

進路を決める大学受験。  
このとき初めて将来のことを考え始めた秋沢を待っていたのは、  
自分自身に対する虚無感やふがいなさの認識である。  
秋沢には小学校から続けていたものがあつた。  
クラブチームにも通い熱心に続けていたサッカー。

「俺は大好きなサッカーを大学に行ってからでも続けるのか？  
サッカーで生きていくんだらうか？」。

サッカーは好きだが自分がサッカーで生きていけるほど才能も実力もない  
と考えた秋沢。結果彼は大好きなサッカーで生きていくことを諦める。  
サッカーに対する情熱が抜けた秋沢の心を、  
ぶつけようのない苛立ちが包み込む。  
さらにこれに拍車をかけたのが秋沢と共に学生生活を送ってきた  
友人達であった。

友人達は秋沢ができなかった、自分の好きなことをして生きていく  
という道を自然と選択していたのだ。  
つい最近まで自分と同じだと思っていた17、8歳の友人達ができた選択。  
料理人。ミュージシャン。絵描き。

自分だけが好きなことで生きることを選択出来なかった。  
自分だけが不自然だった。

## 自己不信

そんな深い挫折感と共に過ごした受験期間。  
秋沢の根底にあったものは、自分の好きなことを自分が裏切ってしまった  
という後悔。  
その後悔の気持ちを持ったまま、  
秋沢は一浪の末、青山学院大学経済学部に進学した。

「自分が本気になって挑戦できるものはなんだろう？」。

受験以来、強い後悔を持っていた秋沢。  
大学入学当初の彼が求めたもの。それは自分の好きなことに  
挑戦しているという実感だった。  
自分と同じ年代で夢に向かって走り出した友人達に負けなくらい  
刺激的な生活を送ってみたい。

しかし、刺激を求めていた秋沢を待っていたのはま単調な毎日だった。  
毎日のように続く飲み会やコンパ、変わらない人達との変わらない会話。  
秋沢は自分が全く成長できていないことに気づく。

「これじゃダメだ！ 自分を変えなくちゃ」。

## リアル（現実感）

自分を変えよう。好きなことを見つけようと行動する秋沢。  
彼が向かったのは大学の図書館。そこで多くの本を読み漁っていた。  
そんなある日、一冊の本が秋沢の目に止まる。

『ジャパニーズドリーム 藤田晋』

そこには今までの自分が知らなかった世界が描かれていた。  
秋沢はその著者に興味を抱く。同じ青山学院大学出身で、  
株式会社サイバーエージェントを設立した起業家。

「へー、こんな人が居たんだ。しかも同じ大学出身か」。

大学の図書館で手に取った一冊。  
これが秋沢にとっての始めの一步になったのだ。  
藤田氏の著書との出会いから起業や経営といった分野に  
興味を持っていった秋沢。彼はたくさんの起業家達の著書や  
経営学の本を読んでいくにつれて、もっとビジネスを学びたくなった。

そして彼は次の行動に出る。  
自分自身がアルバイトで貯めたお金を使い、ダブルスクールで  
中小企業診断士の資格取得を目指し始めたのだった。  
大学に入って初めて出来た目標。  
しかし、自分の進むべき道が見え始めた秋沢を待っていたものは  
リアリティのない現実だった。

まるで受験勉強のような暗記の日々。  
テストに受かるためだけの授業形態。用意されたカリキュラムを  
こなしていくだけの時間。

「なんだこれは？多くの起業家や経営者が語っていた緊張感や  
プレッシャー、夢を追っているという情熱感。  
ここにはそれがないじゃないか」。

深い疑問を解決するため、そして多くの起業家や経営者が

語る環境を求め、秋沢はインターンシップへの道を歩み始める。

-----  
~ 第2話 ~ 環境と成長と  
-----

## 挫折感

当時インターンという言葉すら知らなかった秋沢。それでも経営者の人達と熱く関われる環境で働きたい、自分が求めるビジネス、情熱を持った人との関わりを持ちたいと想い続けていた。その方法を日々模索していた時に出会ったのがNPO法人ETIC. (以下ETIC.) だった。

経営者と学生が直接向き合うことが出来るイベント。ETIC. が主催するインターンシップフェアに参加した秋沢はそこで自分の求めていたものと出会う。喜びと共にETIC. スタッフに自分がやりたいことを熱く語る。そんな秋沢にETIC. スタッフは一つのインターン先の企業を薦めた。ETIC. 内でも厳しいと言われるガイアックスだった。

事業内容なんて二の次。経営者の人達と触れられて、なおかつ人と関わる事が出来る仕事がしたいと考えていた秋沢。当時社員の採用や部署配置のインターン生を募集していたガイアックスはまさに彼が求めていた環境だった。

「ここなら人と関わる仕事ができる、それにETIC. でも厳しいと言われるガイアックスなら自分を変える事が出来るかもしれない」。

「ようし、ここに決めた。やってやる」。

根拠のない自信とやる気が秋沢を突き動かしていた。しかし秋沢が抱いた「自分を変えよう、本当のビジネスを学ぼう」という気持ちは、自らが望んだ厳しい環境によってもろくも崩されるのだった。ガイアックスでの初仕事は新聞に載せる企業広告を考えること。しかもそれを任せられたのは勤務初日。まだガイアックスがどんな企業でどんな事業をしているのかも分からない。ましてや担当の上司以外、社員の人の名前も知らない状態。そんな中作りあげた彼の企画は当然のごとくボロクソに批判された。

「なんで、いきなりこんなことやらされるんだろう。  
初日の俺にできるわけないじゃん」。

秋沢は初仕事で自分の甘さを突きつけられる。  
しかし、それを自分の甘さだとは認識していなかった。  
そんな彼にとって、ここからの三カ月は長く険しい道のりとなった。  
インターンの間、新卒採用を担当していた秋沢は学生でありながら、  
自分より年上の人に対して面接を行ったり、企業説明会の運営など  
を行っていた。その中で何度か企業説明会の司会を担当する。

普段大勢の前で話をする事などなかった秋沢。  
説明会に来る人達はみな自分よりも年上。インターン生であることを  
隠そうとするあまり、緊張は二倍に。あるとき任された司会では、  
極度の緊張からしゃべれなくなってしまった。  
ふがいない自分に気持ちも沈み、自己嫌悪。当然上司からも怒られる。

「お前はまたこんな事もできないのか？  
一体お前はうちになにしにきてるんだ？」。

自分の目標のために行動し飛び込んだインターンという環境で、  
「熱い人達とのつながりを感じたい」とがんばった結果は「自分の弱さ」  
「ふがいなさ」を再確認させられた三ヶ月になってしまった。

「やっぱり俺はだめなんだなあ」。

## リベンジ

三ヶ月のインターンが終わりを迎えようとした頃、  
秋沢は次なる一步の決断をする。  
それはもう一度ガイアックスでインターンをするということ。  
この三ヶ月間インターンでは自分自身の弱さを再確認させられ、  
自分を変えようという願いが叶えられなかった秋沢。  
それでもビジネスに興味を持ち続けていた彼は、  
ビジネスという世界にもう一度挑戦することを決める。

「このままで終われるか！ 絶対見返してやる」

密かに誓ったリベンジと好きなことに挑戦し続けたいという想いを胸に、

二回目のインターンをスタートした秋沢。  
彼が選んだリベンジの舞台は営業。  
自分のがんばった成果がすぐにはわからない人事の仕事より、  
成果がすぐに分かる営業で結果を残す事が過去の失敗をも拭い去る  
近道と考えたからだ。  
そんな秋沢が担当したのは、ネット広告分野に伴う新規プロジェクトの  
営業。

「今度こそ、自分のがんばった成果を残す」。

秋沢は今までにないほどインターンに熱中していく。  
学校に行くのもテスト前に数えるほど。  
朝早くから夜遅くまで働き、終電で帰る日々。  
家に帰ればテレアポや営業の練習。毎日毎日仕事のことを考え、  
夢にまで取引先が出てくるほどだった。

しかし、全く契約がとれない。あっという間に不安が募り、さらに  
自信は消えていく。

「何でこんなことをしているのだろう、  
自分はまだ学生だしこんな辛いこと耐える必要ないんじゃないかな」。

ガンバレどガンバレど契約の取れない日々。  
辛さと忙しさでもう辞めようと何度も思った。  
秋沢は限界だった。秋沢の心はもう折れかかっていたのだ。

「もう辞めようかな」。

「充分がんばったよ。これで辞めたって俺が悪いわけじゃないさ」。

そんな中ふと考えてみる。もう一度自分自身のことを。  
自分は何がしたいのか、何故インターンを始めたのか。  
受験の時。  
友人達が自分のやりたいことに熱中していく様子を、  
ただただ見ていることしか出来なかった自分。  
そんな自然な状況の中、自分だけが好きなことを選択できなかった  
不自然さ。自己不信に陥った日々。  
なんの目標もなくただ時間だけを浪費していた自分。

自分がどこにいるのかもわからないほどの暗闇の中で、  
初めて見つける事ができた小さな目標。

自分の歩いてきた長い道のりを見つめ直すことで秋沢は一つの答えを見つける。

「そうだ、これが俺の望んだ刺激溢れる日々じゃないか！  
自分のやりたいことに熱中できる環境。  
その中で好きなことをがんばれるんだから」。

かつて自分はサッカーが大好きだった。しかし自分でそれを諦めた。  
その時の後悔を思い出し秋沢は奮い立つ。

「俺だってかつて友人達のように自分の好きなことに挑戦しているんだ。  
負けたくない。友達にも、自分にもだ！」。

今までの自分のがんばりは無駄ではなかった。  
秋沢にとっての始めの一步を思い出させてくれたのだ。

「まだまだがんばれる。自分は間違っていない。  
この道は俺の進むべき道」。

そう確信した秋沢はもう一度、厳しい環境へと挑戦していく。  
自分のためにもがんばる。  
そんな秋沢を支えたもう1つの支え。それは秋沢の尊敬する上司の存在。  
当時の上司はインターン当初から秋沢に目をかけてくれた。  
がんばっても報われない辛い時期だった秋沢を支え続け、  
励まし続けてくれた上司を秋沢は心から慕っていた。

「この人が喜んでくれる。その笑顔を見るためにも契約を取ろう」。

そんな気持ちを持ってがんばり続けた秋沢。  
終電で帰るのはもちろん。  
会社が終わってからも上司に付きっきりで練習に付き合ってもらった。  
話す口調やお辞儀の角度、名刺の渡し方から視線の合わせ方まで。  
自分の行動すべてを改善する日々。生活すべてが営業に注ぎ込まれていた。

そんな日々を過ごしながら迎えた二ヶ月目。  
ついに夢にまで見た瞬間が訪れる。まるで本物のビジネスマンのように  
変身した秋沢は、初めて契約を勝ち取る。  
あまりの嬉しさ、そして早く上司に知らせたいという想いで、  
秋沢の手は、考えるよりも早く上司の番号をダイヤルしていた。

しかし、上司の携帯は留守電、仕方なく自分の喜びを残し、次の営業先に向かう。営業を終え、ふと携帯を見るとそこには上司からのメッセージが残っていた。

「やったな秋沢！！ おめでとう！  
お前なら絶対できると思ってたよ。今までの努力は決して無駄じゃなかったな。本当によかった。おめでとう」。

そこにはまるで自分のことのように喜んでいる上司からのねぎらいと、おめでとうというメッセージが延々と記録されていた。最後の方のメッセージは電話の向こうでかすれる上司の声と震える自分の手のせいで良く聞き取ることができなかった。

このメッセージは今もなお小さな携帯電話に大きな勲章として残っている。

秋沢は着々と進んでいく。  
この初契約を境に契約ラッシュが続く。  
ようやく自分の望む結果を残すことが出来た秋沢。  
ガイアックスでインターンを始めてから半年が経とうとしていた頃だった。

---

~ 第3話 ~ 挑戦し続ける理由

---

一億五千万円

ある日、順調に結果を残す秋沢に1つの企画が持ち込まれる。それは大手企業からのプロモーションの案件、取引額一億五千万という企画だ。しっかりとした準備と相手との対話。半年間死にもの狂いでインターンに打ち込み、ビジネスの環境で生きてきた秋沢には全くプレッシャーは無かった。

ビジネスの世界に無縁の一般の学生が、この企画を受けたらどうなるだろう。誰ももがその重圧に怖気づくのではないか。しかし、秋沢は違った。

「やりたい、絶対に成功させてやる」。

秋沢にとってその企画の金額がいくらだろうが全く関係なかった。  
やることは変わらない。  
夜遅くまで企画をブラッシュアップし続ける日々。  
上司や仲間と毎日毎日改善点を出し合った。  
家に帰った回数を覚えているほど、ほとんど会社に泊まりこんだ。  
今までにない大きな仕事。

しかし、秋沢は以前のような悲壮感を感じることはなかった。  
信頼できる仲間と四六時中ビジネスについて試行錯誤する。  
お互いが仕事を成功させようと夢中に意見を叫びあう。  
それは秋沢が望んだ熱いビジネスそのものだったのだ。

今まで真剣に、インターン、そしてビジネスに取り組んできた秋沢は  
見事この企画を成功へと導く。自分の望む刺激溢れる日々。  
人と人がぶつかり合う熱気のあるビジネス。それらを通し秋沢は大きく  
成長していった。自分が変わることは環境を変える。  
それは彼にとっても例外ではなかった。

## 決断

順調にインターンをこなしていく一方で秋沢の胸にはさまざまな考えが  
渦巻いていた。それは自分が未熟者だった以前とは違い、新しい一歩への  
悩みだった。

自分が大学三年を迎え就職について考えなければいけないこと。  
「ガイアックス以外の企業を見てみたい」「留学もしたい」  
それは自分の中に新しい価値観を創るために必要だと考えたからだ。  
様々な葛藤が渦巻く胸のうちを整理すべく、当時自分の上司だった人に  
相談を持ちかけた。  
そこで秋沢を待っていたもの。それはまさに新しい機会への挑戦だった。

「お前はアホか」。

当時の秋沢が留学したかったのはアメリカやニュージーランド。  
それを聞いた上司は秋沢を一蹴した。

「今さらそんな国に行ってどうする、これからは中国だぞ。  
起業とかビジネスに興味のある奴が一体なにを言ってるんだ。  
今度仕事で上海に行くからお前も来い」。

そして次の言葉に秋沢は驚嘆する。

「就職することを踏まえて中国に付いて来るかどうかを今決めろ」。

「え？ い、今ですか」。

この時、秋沢は数々の実績を残してもまだ自分がビジネスのすべてを学び終えたと思っではいなかった。まだまだ自分に足りないものがあると素直に感じていた。

そんな秋沢にとってあまりにも唐突に現れた人生の選択。

この時秋沢は中国の上海へ行くこと、そしてガイアックスへの就職を即決する。

彼は受験の時、自分が好きなことに挑戦しなかったこと、できなかったことを後悔している。だから彼は目の前のチャンスを逃さない。好きなことに挑戦するのに理由なんて要らない。好きだから挑戦する。それが自然なことだと彼は知っているのだ。

人生の選択を終えてからすぐに秋沢は中国へ飛ぶ。国際都市上海。二泊三日と短い期間だったがそこには秋沢にとって充分すぎる衝撃があった。今まさに成長を続ける都市でビジネスをする人達の目、街並み。すべてにおいて圧倒された三日間だった。秋沢はその活気に再び大学受験のときを思い出す。目の前に挑戦できる環境がありながらそれを逃してしまった自分。立ち止まっている自分の横を追い抜かれる気持ち。

「この人達は友人達と同じだ。自分のやりたいことに夢中に取り組んでいる。目はまっすぐ自分の目標に向かってる！やばい！！このままでは置いていかれる、また取り残されてしまうぞ」。

世界のトップに立とうとする人達。その人達が放つ熱気。彼らは本気で世界に挑戦しているように見えた。この環境で勉強したい。彼らと一緒に勉強したい。そう強く決心し秋沢は一時帰国をする。その後再び中国へ戻った秋沢。彼の中にはアメリカもニュージーランドも無かった。ただ中国で勉強したい。その気持ちだけが合ったのだ。

そんな彼を待っていたのは、日本では絶対に関われないであろう人達との出会いだった。飛び込みで営業をする自分とさまざまな国の

エリート達が当たり前のように会ってビジネスについて熱く語り合う。  
秋沢のビジネスに本気になって答えてくれる。  
その一つ一つが自分の中に吸収される日々。  
世界のビジネスの最先端で走り回る日々。  
その時の中国でしか味わえない経験を持って秋沢は三ヵ月後  
日本へ帰国する。

## 自信と謙虚

現在秋沢はガイアックスの社員として新規プロジェクトを担当している。

「いやぁ、まだまだ自分に自信があるとは言えないなぁ」。

秋沢はこれだけの成果を残し、たくさんの経験をしてきても  
その謙虚な姿勢は崩さない。

「三步進んで二歩下がる」この言葉はたとえ小さな一歩であっても、  
着実に努力し、進んでいくことで必ず自分の道に繋がっていくという  
一歩を踏み出すことの大切さが表されている。

しかし忘れてはならないのは、ただ進むのではなく

「二歩下がる」という表現があること。

自ら引いて自分を客観視する意味もあるのだ。

秋沢は着実に歩むとともに、一歩戻って常に自分と自分の歩いてきた道を見つめなおすことを忘れない。

彼の姿勢はこの言葉をそっくり体現しているのだ。

進むだけではなく、一歩引いてみる謙虚さは、裏返せば向上心に繋がる。  
だから秋沢は決して自分に満足しない。

今、秋沢が持っている夢は起業すること。

自分の始めの一歩になった藤田氏のように、  
焼けるような熱気の中を生きる起業家になりたい。

かつて自分が望んだ刺激的な日々を送り、熱気に包まれている秋沢。  
数々の本で出会った先輩起業家にも、中国で出会った世界を見据える  
ビジネスマンにも負けない夢を見つけた秋沢は、依然その歩みを  
止めようとしなない。もっと刺激的な毎日を送りたい、  
先輩達に負けない熱い毎日を送りたい。

「もう二度と、自分に後悔だけはしたくない」。

だから彼は謙虚である。  
今の自分が終着点ではないと知っているから。  
だから彼は挑戦する。  
自分はそこにたどり着くことができると信じているから。

インターンを通して多くの結果を残し、  
大きな成長を遂げた秋沢。周りからみれば大変身を遂げたのだ。  
しかし、今の自分を創るきっかけとなった最初の一步は、  
誰も踏み出すことが出来る小さな、小さな、  
一步であったことは忘れることが出来ない。

だから秋沢はこれからも挑戦する。  
小さな一步もその先には大きな未来が続いている。  
そう信じているから。

第3話終わり  
(文中敬称略)

---

読者アンケートのお願い -----

メールマガジンをさらにより良くしていくために  
みなさんのご意見を是非お聞かせ下さい！！

ご協力、よろしく申し上げます。

【宛先】 info@etic.or.jp  
【件名】 メールマガ10月5日号 アンケート

.....【コピー&ペーストしてご利用下さい】.....

1. どのようにしてこのメールマガを知りましたか？
  - 1) ピラ
  - 2) ETIC.のイベント
  - 3) 友人の紹介
  - 4) そんなの忘れた
  
2. 今回(10月5日号)のメールマガジンの内容について、  
総合的な満足度をお聞かせください。
  - 1) 非常に満足している
  - 2) まあ満足している
  - 3) やや不満である
  - 4) 非常に不満である

3. 今回のメールマガジンを読んで  
どんなことを感じましたか？自由にお書きください。
4. 主人公（もしくはライター）に一言！
5. 今後どんな人の記事を読みたいですか？
6. 他に持っているおもしろいメルマガがあれば教えてください。

..... 【コピー&ペースト終わり】 .....

## 【編集後記】

みなさんこんにちは。今回、原稿を担当した大森です。  
さて今回のメルマガはいかがだったでしょうか？  
今回の主人公秋沢崇夫さん。  
みなさんは自分に自信をもっていますでしょうか？

私は自分の後悔を力に変える。そんな秋沢さんの話を聞いて  
中国のことわざ、『臥薪嘗胆』を思い出しました。  
この言葉は、ある武将が負けた戦の悔しさを忘れぬように薪の上に  
座り、死ぬほど苦い胆汁を舐めリベンジを誓い、見事達成する。  
という意味です。

二人にはある共通点があります。それは、二人が自分の力を  
信じているということです。悔しさやリベンジの気持ちを持ち続け、  
挑戦し続ければ必ず達成できると信じているのです。  
私にも皆さんにも後悔の思い出はあるでしょう。  
それを単なる後悔で終わらすのか。新しいことへ挑戦するための  
エネルギーとするのか。みなさんはどちらでしょうか。

新しいことに挑戦するのは誰だって怖いものです。  
「失敗したらどうしよう」「負けたらかっこ悪い」  
誰だってそう思うでしょう。それでも秋沢さんは挑戦し続けたのです。  
がんばり続けました。その結果はみなさんのご存知の通りです。

実は私にも「絶対にこの道で生きていく」という夢がありません。  
でも私は、この秋沢さんとの出会いから  
「本気で自分の好きな道を探そう」「新しいことに挑戦しよう」  
と考えています。

以前の秋沢さんのように自分に自信のない人。  
私のように自分の夢を見つけられない人。  
一緒にがんばりませんか。一步を踏み出しませんか。  
その結果いつかお互いが今よりもっとすばらしい環境で活躍できること。  
そして出会えることを楽しみにしています。

ライター：大森 展弘